

## ☆第 94 回上智大学哲学会大会のお知らせ

今秋、下記の要領で第 94 回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうへご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

今回の大会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、Zoom を利用したオンライン学会となりました。参加をご希望の方は 6 月 17 日（木）までに上智大学哲学会のメールアドレス ([sophia.philosophy.society@gmail.com](mailto:sophia.philosophy.society@gmail.com)) までご連絡下さい。折り返し、ミーティングの ID とパスワードを送付させていただきます。

**日時：2021 年 6 月 20 日（日） 13：30～16：30**

**会場：Zoom によるオンラインでの開催**

### ★プログラム

#### I 研究発表 13:30～15:15

- 津田栞里（一橋大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）  
バウムガルテンにとって「スピノザ」とは何だったのか  
——ランゲのスピノザ主義論とヴォルフのスピノザ論の狭間で
- 河合一樹（所属：なし）  
聖人のいない国—本居宣長の神武天皇観
- 庄子綾（本学哲学科非常勤講師）  
自我現象について——カッシーラーによる認識論の哲学史の再構築——

——休憩——

#### II 講演 15:30～16:30

- 島藺進（本学グリーンフケア研究所所長）  
現代科学技術の方向づけとその根拠  
——規範を見失う科学技術の制御という課題——

#### III 懇親会（オンライン） 16：30～17:30（予定）

## ☆講演要旨：現代科学技術の方向づけとその根拠

——規範を見失う科学技術の制御という課題——

島菌進（本学グリーンケア研究所所長）

2020年のノーベル化学賞をゲノム編集技術、クリスパー・キャス9を開発した女性科学者2名が受賞した。その2年前の2018年11月、香港で開かれた国際ヒトゲノム編集サミットで中国の科学者が病気を防ぐためにゲノム編集を施した女児を出産したことを報告し、世界に衝撃が走った。

科学技術が人類の運命を大きく変えてしまう可能性をもち、それが必ずしもよいことばかりではない。このような事態が明確に現出したのは、原爆の開発がその始まりで原発開発はそれを引き継いだ。そして、環境問題と並行して進行した。

こうした問題に哲学的関心をもって向き合った日本の論者に、唐木順三と武谷三男がいる。1980年前後に唐木と武谷によってなされた論争は、今も振り返ってみる価値のあるものだろう。日本の科学者と哲学者がこうした問題に取り組む意欲を見せた時代の意義ある記録である。

とくに唐木は、京都学派の影響下で哲学的な素養をもった人物だが、ある時期からは日本の宗教・思想・文芸の歴史を通して、思考を掘り下げようとした。その成果には現代日本の人文学から見ても、汲み上げるべきものがあるのではないだろうか。

21世紀に入り、生命科学、情報科学等の格段の進展によって、人類は新たに科学技術の方向づけと制御という大きな課題に直面している。ゲノム編集、合成生物学、AI、脳神経科学などさまざまな領域で、「科学技術に倫理が追いつかない」と表現されるような事態が生じている。

ここでは、この問題に独自のしかたでアプローチしているフランスの科学哲学者、ジャン＝ピエール・デュピュイの考察を紹介し、その意義について論じたい。デュピュイの論の特徴の一つは、宗教に重きを置いているところだ。宗教伝統に関わる「賢明な破局論」、「悪の不可視性」など独自の概念は省みる意義があると思われる。

また、彼が重視する、イヴァン・イリッチやルネ・ジラルド、またハイデガーの子供たちとよばれるハンナ・アレント、ハンス・ヨナス、ギュンター・アンダースなどの思索は、それぞれキリスト教やユダヤ教の伝統から汲み上げられたものが小さくないと思われる。

全体としては、唐木とデュピュイの考察を照らし合わせながら、表題に掲げた問題にそったささやかな歩みを進めたい。

## ☆研究発表要旨

バウムガルテンにとって「スピノザ」とは何だったのか

——ランゲのスピノザ主義論とヴォルフのスピノザ論の狭間で

津田栞里（一橋大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）

18世紀ドイツ哲学の中心的存在であったヴォルフ学派といえば、美学の創始者として知られるバウムガルテン（Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714–1762）の名が挙げられることが多い。彼はライプニッツやヴォルフ（Christian Wolff, 1679–1754）の正当な後継者として、あるいはカントが講義で使用した教科書の著者として、ライプニッツ哲学やカント哲学との比較を通じて特徴付けられてきた。しかしながら、J・イスラエルが提唱する「論争に焦点を当てる方法」（*controversialist method*）を用いることで、私たちは従来とは異なる新しいバウムガルテン像を提示することができる。

1720年代にハレ大学で勃発した敬虔主義神学者ランゲ（Joachim Lange, 1670–1744）と合理主義哲学者ヴォルフの一大論争は、ハレから追放されたヴォルフが1740年同地に帰還するまでのおよそ二十年にわたって続いた。ヴォルフの自然科学的な世界理解では決定論に陥ってしまうと考えたランゲが、無神論者を意味するスピノザ主義者という蔑称を用いて彼をひどく糾弾したのである。大学内部の権力闘争と評価する研究もあったものの、ランゲ-ヴォルフ論争は同時期をハレで過ごしたバウムガルテンにとってセンセーショナルな事件であり、近年の先行研究が指摘するようにその論争が彼の思想形成に与えた影響は大きい（cf. Schwaiger[2011]pp. 79–82, Dyck[2018]）。そして、その影響はバウムガルテンのスピノザ解釈にも確認される。

本発表ではランゲのスピノザ主義論（*Bescheidene und Ausführliche Entdeckung der falschen und schädlichen Philosophie in dem Wolffianischen Systemate Metaphysico*, 1724）とヴォルフのスピノザ論（*Theologia naturalis*, 1736–37）を手掛かりに、バウムガルテンの『形而上学』に確認されるスピノザ及びスピノザ主義への言及の背景を探る。それによって、発表者が提唱するスピノザへの批判的応答者という新たなバウムガルテン像の基礎付けを行いたい。

＊

聖人のいない国一本居宣長の神武天皇観

河合一樹（所属：なし）

現在、日本思想史研究では近世における古典の注釈がどのような知的営為であったのかということが改めて問題となっている。すなわち、注釈の妥当性という観点からは単なる誤謬として閑却されてしまう明らかな曲解や偽書の生成などを当時の知の在り方として理解しようとする試みである。本発表では、江戸時代を代表する国学者・本居宣長が同時代の儒学・神道の言説を意識しつつ日本古典に対する新たな解釈を行い、独自の国家観・

古代観を作り上げる様子を概観したい。

具体的に取り上げるのは、『古事記伝』における神武天皇に関する注釈である。現在一般に伝説上の初代天皇とされる神武天皇であるが、宣長はそれより前に兄である五瀬命が天皇であったという特異な見解を表明する。そのこと自体は専門家には既知のことであるが、それがどのような意味を持っているのかということについては今日まで十分に論じられていない。本発表では、そのことの背後には儒者・荻生徂徠が描いた諸制度の製作者としての「聖人」に対する批判があったということを指摘する。

また、同時に同時代の神道の言説も問題となる。宣長とも交流のあった垂加神道家・谷川士清の『日本書記通証』では、神武天皇の即位は古代日本において様々な制度が成立した画期として描かれているが、『古事記伝』の注釈はそれらの主張を軒並み否定している。その点を天皇号・氏姓制・暦などの問題を通して簡単に紹介したい。宣長はこれらのことについて誰かが特定の時点で定めたものではなく、あくまで自然と成立して来たものであるとする。その背後にも「聖人」批判の意図があったものと考えられる。

荻生徂徠は「東海聖人を出さず」として中国を模倣しなければならないことを主張した。それに対して宣長は「聖人」を勝手な教えを作って人々を混乱させた存在へと転倒させる。そして、神武天皇への注釈を通して実際に古代日本を「聖人のいない国」として描き出すのである。

＊

## 自我現象について——カッシーラーによる認識論の哲学史の再構築——

庄子綾（本学哲学科非常勤講師）

カッシーラーの哲学史研究の中で、初期の著作である『認識問題』第1巻～第3巻（1906～1920年）は、彼の最初の大きな研究成果として今も知られている。そこで探究された近代哲学と科学における認識の問題は、その後の主著『象徴形式の哲学』（1923～1929年）にも主要な論点として受け継がれている。特に主著第3巻では、「認識の現象学」というタイトルが示す通り認識の問題が主題とされ、認識の構造や働きが象徴形式という人間に特有の知の働きから捉え直され、新たな認識論が提示された。さらには、第3巻の冒頭で、執筆中の第4巻のタイトルは「生と精神——現代哲学批判」であり、内容は現代哲学への批判的考察になると予告されている。実際には、この第4巻が刊行されることはなかった。しかし、第4巻のために書かれた1920年代から40年代にかけての草稿やメモからは、第4巻では、象徴形式の哲学に基づく新たな認識論の立場から、哲学史・思想史を顧みその再構築を遂行するという企図が読み取れるのである。

そこで本発表では、カッシーラーが初期の認識論研究から象徴形式の哲学を形成したことにより、どのような観点から認識論を振り返ることが可能となり、認識論の哲学史を再構築しようとしたのかを考察する。残された草稿やメモから推測される哲学史の構想は広範なものであるため、本発表ではゲーテ由来の原現象を基礎現象として捉え直し、三つの

基礎現象にそれぞれ対応する認識論の中で、第一段階である自我 - 現象の認識論に焦点を絞る。その代表的な哲学者として、デカルト・ベルクソン・フッサールが挙げられており、とりわけデカルトは彼の博士論文の主題であり、本格的な哲学研究の出発点と言える。しかし、その後のデカルト研究を辿ると、『認識問題』でまとまった記述があるものの、主著では僅かに触れただけにとどまっている。だが、第4巻のための草稿やメモではデカルトへの言及が増えており、現代哲学であるベルクソンとフッサールの思想に連なるものとみなされている。これらの相違点を踏まえつつ、過去の研究と主著、そして未来に刊行する予定であった続刊の構想を重ね合わせることで、カッシーラーが目指した認識論の哲学史の姿を垣間見ることができると思われるのである。